

日野田 崇「膨らむ手色形楽」 by imura art gallery



悪は真面目で凡庸 / Evil is Earnest and Commonplace 2021 ceramic / セラミック 32x74x28cm
撮影 福永一夫 photo / Kazuo Fukunaga

会期:2021年7月27日(火)~8月15日(日)
会場:CADAN有楽町 東京都千代田区有楽町1-10-1 有楽町ビル1F
時間:火~金 11時~19時 / 土、日、祝 11時~17時
定休日:月(祝日の場合は翌平日)※会期中8月9日(祝)は営業、翌10日(火)は休業

最新の情報は、CADAN有楽町ウェブサイトでご確認ください。
<https://cadan.org>

この度、CADAN有楽町にて日野田崇の個展「膨らむ手色形楽」by imura art galleryを開催いたします。

「手色形楽」という言葉は、美術や工芸とはことなる日野田独自の概念で、作家にとっての色やかたちそのものの価値をもう一度見つめようという試みです。今回の個展では、この概念に基づいて制作された新作4点と近作を、カッティングシートで装飾された空間に発展・拡張して展示いたします。

素材に土を用いた陶芸という形式をとりながら、独特な有機的フォルムと、そこに描かれる二次元表現からなる作品は、唯一無二の存在感を放ちます。

日野田は、色やかたちに作品を観る者との意思疎通の可能性を感じていると言います。色とかたちは本来、伝達手段であり、言語という方法に囚われずに伝えられるものがあるのではないのでしょうか。会場の作品群から、作家のこぼれを感じとっていただければと思います。

視覚世界を揺さぶる「手色形楽」

2020年、名古屋のガレリア・フィナルテを会場に開催された日野田崇の個展「吼える手色形楽」を観覧した。この展示は、前年に開催されたイムラアートギャラリーにおける個展の続編という位置づけで、1点の作品が両会場をつなぐように共通して展示された。それは物語的な時間軸に沿った連続性を示すためではなく、個々に制作されていた作品が、展示空間とセッションするように新たな世界を作り出していき、日野田ならではのスタイルだと、書いたことがある。今回、本人による本展のためのノートを拝見する機会を得て、改めて考えを巡らせてみたい。

近年、いわゆる伝統工芸の技術を起点としながらも、素材に立ち返り、新たな美意識や手段を積極的に取り入れる若い世代に着目し、「工芸」の在り方を問い直すような企画展が相次いで開催された。しかし日野田の制作からは、少し異なる思考が感じられる。

日野田にとって陶芸の技術を用いる理由の一つは、色にある。先述のノートによれば、「陶芸で使う鉱物質の顔料」によって作り出される「重みや手触り」、焼成を経ることによる「耐久性」、さらには他の素材にない「陰のような独自の暗さ」、これら陶芸によってのみ実現可能な色合いと実在性によって、作品の色が「受肉」という。一方、漫画、浮世絵などに影響を受けた明瞭な描線は、自身が「圧倒的な心理上のリアリティ」を感じるという理由で用いられている。これらの作品を配置した展示空間に立つと、目に映るものが視覚を通して、触覚や聴覚にも訴えかけてくる。日野田はこの視覚世界をつくるために、最適な素材と技法を選んできたように思うのだ。

個別の作品のタイトルやテーマには、現代の社会情勢に対する疑念や危機感にもじむが、日野田は、モチーフとは制作の「動機」と明言する。「膨らむ手色形楽」と題する今回の展示ではどのように身体感覚が揺さぶられるのか、ライブに向かうような楽しみがある。

(多治見市モザイクタイルミュージアム 学芸員 村山閑)



個展「吼える手色形楽」展示風景 installation view, solo exhibition "Howling Hands on Visionamusement"
ガレリア フィナルテ／名古屋 Galleria Finarte, Nagoya 2020
撮影／福岡 栄 photo / Sakae Fukuoka

「膨らむ手色形楽」展のためのノート

日野田崇

私は、2019年にイムラアートギャラリー（京都）での個展「手と色形楽」をおこなった際に、「手色形楽(しゅしきけいがく) / Hands-On Visionamusement」という言葉を初めて公にして使いました。それは、「Art」、「美術」、「アート」の、どの腑分けにも完全に当てはまらない自身の制作を粹づけるための造語です。そして、それが指し示すのは、物質、つまり、身体や手を使ってなんらかの働きかけを行う対象を基盤にした、色とかたちを扱う制作です。それはこれまでの過去の自作の多くに対しても適用できる考え方です。自分の身体の時間的、空間的な有限性を前提にして行う造形行為であり、むやみやたらにその規模を拡張することはありません。そこには人間の大きさにあわせた中庸さがつねにあります。

手色形楽のありようは、美術史上のオルフィスムや、グラフィティ文化のありよう、そして、オーネット・コールマンの音楽に見られるような、ハーモニー、メロディー、リズムの渾然とした状態を参照しています。ここで音楽の比喩を持ち出すのは、コンセプトや言語の体系に容易に回収され得ない強固な形式をつくるためです。色やかたちは単体で、なんらかの印象をもたらしますが、それが真に人間の精神に働きかけるのは、他の要素と組み合わせられ、複雑な関係性、流れが生じたときです。つまり、見る人は音、色、かたちそのものを味わうというよりも、じっさいにはそのあいだに生じる空間的、時間的な変化や、強弱の対比の構成を鑑賞しているのだと言えます。

色に関しては、ひとつ重要な点があります。科学的な視点で見れば、物質が反射している光の波長によって脳の中に色の認識が生じているのでしょう。しかし、陶芸で使う鉋物質の顔料には、実感として重みや手触りがしっかりとあるように感じられます。そして、焼成されることによって、半永久的な耐久性が生じ、他の素材にはない調子、陰のような独自の暗さを持ちます。この暗さは光を基調にした映像作品などには見られないものです。ここでの色は肌合い、地上的な重さとしてしっかりと結びついているように思います。このことは私にとって非常に重要で、色の「受肉」といえると思います。

かたちは空間の模擬体験を導く要素でもあります。人の視線は、作品の面や輪郭をなでるように滑っていき、方向付けられます。それは単なる網膜的な視覚体験ではなく、同時に触覚的な3次元空間のなぞりでもあるのです。人は足でリズムを刻むかのように、かたちを体験することができます。

色やかたちを実際に扱う手法に関してですが、まず私にとっては、西洋ルネサンスの発明した遠近法や陰影描写（これは自分にとって学校教育の中で非常に厄介な代物でした）よりも、作者不詳のイラストや、マンガ、浮世絵、大津絵などの描写に見られる明瞭な輪郭線で縁取られた造形のほうに、圧倒的な心理上のリアリティが感じられます。その文脈から述べると、とくに2000年代後半以降に私が大きく影響を受けたのは、1940-50年代に活躍したアメリカのイラストレーター、James Floraの作品でした。

また、モチーフに関してですが、これは言葉の本来の意味で、制作を始めていくときの動機となっているもので、作品の内包する内容、主題ではありません。作品の内容はあくまで、色とかたちであるからです。しかし、もちろんこの時代に暮らす一人の人間として、世界や社会のありようには強い関心を持っています。そしてこれは自分にたまさか与えられた生の時間を特徴づけるものです。しかし一方で、その動機から出発した手色形楽の作品は最終的にそれとは異なる形式へと昇華します。

今回の展示では、彩色された陶の立体、そしてその延長上にあるギャラリー空間を、カッティングシートを使った線などによって、ひとつなぎにするようなかたちのグルーブをつくりだし、見る人が意識偏重的な意味を受け取るのではなく、身体感覚を使って共振することのできる造形を現出させることができると考えています。

日野田 崇 (ひのだ たかし)

1968 兵庫県生まれ
 1991 大阪芸術大学芸術学部工芸学科陶芸コース卒業
 2019 嵯峨美術大学(旧:京都嵯峨芸術大学) 教授
 現在 京田辺市に在住、制作する

◆主な個展

2011 「新しい筋肉」イムラアートギャラリー京都、イムラアートギャラリー東京
 2012 「古い松と保守の病-Old Pine, Conservatism-」 ガレリア・フィナルテ(名古屋)
 2013 「音のない声」ドラド・ビーチ、プエルト・リコ(Fist Art Foundation Presents),
 「僕のものだった世界」エルサ・アート・ギャラリー(台北、台湾)
 2014 「渦の中で渦巻く渦の中に見える渦の中の塵」イムラアートギャラリー京都
 2015 「日野田崇 - 陶芸」アリアナ美術館(ジュネーヴ、スイス)
 2016 「世界の陰」エルサ・アート・ギャラリー(台北、台湾)
 2017 「空気の民」イムラアートギャラリー(京都)
 2018 「世界を肯定する」ガレリア・フィナルテ(名古屋)
 2019-20 「手と色形染」イムラアートギャラリー(京都)
 2020 「吼える手色形染」ガレリア・フィナルテ(名古屋)

◆主なグループ展

2011 「New Millennium Japanese Ceramics: Rejecting Labels & Embracing Clay」
 Northern Clay Center(ミネアポリス、アメリカ)
 2012 「Fairytale, Fantasy, and Fear」Mnit Museum Craft+Design(アメリカ)
 2013 「Yamato Dynamics」Gillman Barracks(シンガポール)
 「連続体をつくりあげる 現代工芸の再考」(アリゾナ州大学美術館/アメリカ、2014年秋にかけて全米5カ所をツアー)
 2014 「第9回パラミタ陶芸大賞展」(パラミタミュージアム/三重県)
 2015 「実在する土」第18回シャトルー国際陶芸ビエンナーレ(シャトルー、フランス)、六甲ミーツ・アート芸術散歩2015(神戸)、
 2015-16 「Takashi Hinoda et Hadrien Dussoix」In Situ Gallerie(モルジュ、スイス)
 2016 「Very Addictive」銀川現代美術館(中国)、「Rencontre - いま、ここで、出会う<交差する現代陶芸コレクション>」
 兵庫陶芸美術館(篠山)
 2016-17 「Ways of Clay 未来への視点 第4回ジャカルタ現代陶芸ビエンナーレ」
 インドネシア国立ギャラリー(ジャカルタ、インドネシア)
 2017 「Autour du Japon VI」19 Paule Fort, Paris, France
 2019 「Sodeisha - Connected to Australia」ニューカッスル・アート・ギャラリー(オーストラリア)
 2021 「タイル考〜陶芸の視座より」多治見市モザイクタイルミュージアム(岐阜)
 「GENERATIVE - アウト オブ ダークネス」オンラインエキシビション

◆受賞歴

1992 朝日陶芸展 朝日陶芸秀作賞受賞
 1993 陶芸ビエンナーレ 特別賞(富士カントリー賞)受賞、花の器ビエンナーレ(草月美術館 東京) 佳作賞受賞
 1994 The 14 th Biennale Internationale de Ceramique d'art 1994(ヴァロリス国際陶芸ビエンナーレ/
 Chateau Musee/Vallauris, France)
 Prix de la Chambre Syndicale des Ceramistes(陶芸家協会賞)受賞、朝日陶芸展 新人陶芸賞受賞
 1995 日本陶芸展 文部大臣賞受賞
 1998 朝日陶芸展 陶芸奨励賞受賞
 2001 朝日陶芸展 奨励賞受賞
 2010 平成21年度京都府文化賞 奨励賞受賞

◆パブリックコレクション

土岐市、ヴァロリス美術館(フランス)、滋賀県立陶芸の森 創作研修館(信楽町)、兵庫陶芸美術館(篠山)、
 世界のタイル博物館(常滑市)、国立国際美術館(大阪)、ジェームズ・ウォレス・アーツ・トラスト(ニュージーランド)、
 アリゾナ州立大学美術館(アメリカ)、ミント工芸+デザイン美術館(ノース・キャロライナ/アメリカ)、
 アリアナ美術館(ジュネーヴ/スイス)、岐阜県現代陶芸美術館、ニューカッスル・アート・ギャラリー(ニューカッスル/オーストラリア)